

Title	ケアへの「意味づけ」と社会関係の変化： ケア従事者自身によるケア関係の解釈と逸脱の医療化・福祉化
Sub Title	
Author	新井, 智浩(Arai, Tomohiro)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2005
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学： 人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.60 (2005.) ,p.138- 141
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	平成16年度[慶應義塾大学]大学院高度化推進研究費助成金報告
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000060-0138

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

だろうか。

追 記

なお、本研究の成果/経過は、日本教育社会学会第 56 回大会（2004 年 9 月 12 日 東北大学）および日本政治社会学会院生研究報告会（2004 年 11 月 21 日 慶應義塾大学）にて、口頭報告を行った。

参考文献

- Dawson, Richard E., Kenneth Prewitt and Karen S. Dawson, 1977 [1969], *Political Socialization 2nd Edition*, Little, Brown and Company. = 1989, 加藤秀治郎・中村昭雄・青木英実・永山博之訳『政治的社会化——市民形成と政治教育』芦書房。
- Giroux, Henry, 1992, "Resisting Difference: Cultural Studies and the Discourse of Critical Pedagogy," Grossberg, Lawrence, Cary Nelson and Paula Treichler eds., 1992, *Cultural Studies*, Routledge: 199-212. = 1996, 大田直子訳「抵抗する差異——カルチュラル・スタディーズと批判教育学のディスコース」『現代思想』24(7): 129-47.
- Greenstein, Fred I., 1965, *Children and Politics*, Yale University Press. = 1972, 松原治郎・高橋均訳『子どもと政治——その政治的社会化』福村出版。
- 稲垣恭子, 1990, 「教育社会学における解釈的アプローチの新たな可能性——教育的言説と権力の分析に向けて」『教育社会学研究』47: 66-75.
- Jones, Gill and Claire Wallace, 1992, *Youth, Family and Citizenship*, Open University Press. = 2002 [1996], 宮本みち子監訳, 鈴木宏訳『第 2 版 若者はなぜ大人になれないのか——家族・国家・シティズンシップ』
- Karabel, Jerome and A. H. Halsey eds., 1977, *Power and Ideology in Education*, Oxford University Press. = 1980, 潮木守一・天野郁夫・藤田英典訳『教育と社会変動——教育社会学のパラダイム展開（上・下）』東京大学出版会。
- 小玉重夫, 2003, 『シティズンシップの教育思想』白澤社。
- 志水宏吉, 1985, 「『新しい教育社会学』その後——解釈的アプローチの再評価」『教育社会学研究』40: 193-207.
- 志水宏吉, 1993, 「変化する現実, 変化させる現実: 英国『新しい教育社会学』のゆくえ」『教育社会学研究』53: 5-30.
- 上野俊哉・毛利嘉孝, 2000, 『カルチュラル・スタディーズ入門』筑摩書房。
- Willis, Paul E., 1977, *Learning Labour: How Working Class Kids Get Working Class Jobs*, Saxon House. = 1996 [1985], 熊沢 誠・山田 潤訳『ハマータウンの野郎ども——学校への抵抗 労働への順応』筑摩書房。
- 吉見俊哉, 2000, 『思考のフロンティア カルチュラル・スタディーズ』岩波書店。

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻博士課程

ケアへの「意味づけ」と社会関係の変化

——ケア従事者自身によるケア関係の解釈と逸脱の医療化・福祉化——

新 井 智 浩*

1. はじめに

当該社会においてどのような人間関係が志向され、それがどのような社会関係の下で取り結ばれていくのかを、ミクロ社会学の観点と方法論に基盤を置きつつも、より広範な社会変動の側面にも目を向けつつ明らかにすることが本研究における根源的な問題意識である。そこで具体的な対象として、「ケア関

係」に関する考察を展開した。以下こうした課題にどのようなポイントから考察を展開したのかについて述べる。まずケア関係を志向し従事する人々を対象とし、その関係性が日々の業務の中からどのように（再帰的に）意味づけられるのかを記述する。その際、ケア従事者たちはその関係に何を期待し、それがどのように満足されるか、あるいはされないかが焦点となる。次にケア関係では当該社会におけるある種の逸脱（病い、障害）に起因する社会問題と当該社会の規範とがもっとも密接に、かつ先鋭的な様相の下で関係し、影響を及ぼしあうと考えられる。そこで、社会変動がケア関係をどのように枠づけるかと同時に、当事者はそうした枠組をどのように取り込み、あるいは相対化するかが焦点となる。本研究ではケア従事者の主観的意味世界を再構成する方法として、ひとつの「ケア従事者のモノグラフ」を作成を試みた。具体的には参与観察による予備調査から始まり、ケア従事者に対する聞き取り調査を実施した。このようにして得られたデータをもととして、ケア従事者の意味形成過程が関係性にまつわるどのような原則や規範に影響されるのかについて考察し、それがどのような当該社会の変動と結びつきうるのかを〈社会の個人化 (Individualization)〉(進藤, 2004) という概念を手がかりとして模索した。

2. 事例と考察

本研究では、社会学における相互行為論の視点から障害者の自立生活センター（以下「CIL」）における介助者（以下「介助者」）を研究対象とした。報告者は修士学位論文の執筆にあたり、2001年5月より都内R区のセンターAというCILにパートタイムの介助者として勤務している。聞き取り調査に関しては同年夏にセンター事務局の介助コーディネーターに仲介を依頼し、3名のインフォーマント（男性2名、女性1名）の紹介を受けた。聞き取り調査は同年秋と翌年秋の2回行われ、2002年秋には、報告者からの直接の依頼で新たに1名の男性介助者がインフォーマントとなることに承諾した。聞き取りは半構造化インタビュー (Flick, 1995=2002: 9-121) にしたがって行われた。

聞き取りとそのトランスクリプト、その後のデータ解釈過程で明らかとなったのは、まず介助者達の置かれている位置関係の「微妙さ」である。CILにおけるケア関係では常に利用者（＝障害者）がいかにか自らの意思が尊重されるような生活を営むことができるか、また利用者の自己決定をスポイルせずに、いかにしてクオリティの高いケアを提供できるかが重要視される。ここではリハビリテーション的な考えが中心にある従来の福祉専門職教育とは違ったケア関係構築の実践が求められる。とくに「介助者は手足たれ」というスローガンに代表されるように、施設収容主義を批判してきた障害者運動の流れの上にあるCILではそうした「利用者による自己決定の尊重」は重要な原則となっている。したがって、介助者たちは個々具体的な介助関係においては、利用者に対する干渉や介入を極力避けるような振る舞いを要求される。これはある意味ではケア関係がある種の「個人化」の側面を持ちつつあるともいえ、そのような局面の中で介助者達がどのような関係構築を実践し、それをいかに意味づけるのかという点は〈社会の個人化〉というコンテキストにおける人間関係の形成局面を明らかにしようとも考えられよう。

こうした考察を踏まえて明らかとなったのは、介助者は介助関係のなかで「利用者による自己決定の尊重」を関係性構築の原則として内面化するものの、そこにはある種の「戸惑い」や「わだかまり」を残さざるを得ないのではないかということである。これは、介助者となる動機として「人と接する仕事をしたかった」(N氏)と語られたように、ある種の対人関係への志向の高さがあり、いわばケア関係を通じた人間関係の親密さへの希求だともいえる。しかしながら、自己決定という概念自体はこの「親密

さ」を批判するところから形成されてきた原理であり、介助者の意味づけ過程の中にはこの二つの要素が微妙な均衡をとりつつ並存するなかでなされているといえる。

3. 課題と展望

今回の研究に関していくつかの課題が浮上した。ひとつはこの研究過程に対して、テーマ副題にある〈逸脱の医療化・福祉化〉というタームがどのように関わるのかということである。そもそも「病い」、もしくは「障害を負う」ということがどのような意味で「逸脱」だと言いつけるのかについては明らかとしなかった。この点については、たとえばパーソンズ(T. Parsons)による〈病者役割〉概念が障害を負うという点にも適応可能なのか、またコンラッドとシュナイダー(Conrad & Schneider)による〈逸脱の医療化〉議論から病いや障害を負うことを逸脱であると考えうるのかを緻密に検討する必要があるだろう。また〈福祉化〉という概念に関して、それが〈社会の医療化〉という先行概念とどのような相違を持つものなのかについては明らかとしないままに研究を展開した。この点に関して言えば野口裕二による言及(2004: 63-76)があるものの、福祉領域を医療領域と比較すれば、フリードソン(Freidson)が〈専門家支配〉というかたちで問題化したような「専門職による領域の組織化」(1970=1992)は(日本の)福祉領域において妥当するのかどうかを今後の推移を含めて注意深く観察する必要がある。さらに、〈社会の個人化〉という概念をめぐる混乱がある。本研究において指摘を受けたのは、この概念がいわゆる〈社会の私化(privatization)〉(片桐, 2000: 227-231)とどのような相違点を持つのかということであった。この点に関しては、特に個人化が示唆する「決定と責任をめぐる個人への圧力の増加」という側面に加えて、個人化がより状況の建設的側面を持った自発性を見せることができるかどうかの議論を通じて今後注意深く検討されねばならないだろう。

とはいえ、本研究においてひとつの「ケア従事者のモノグラフ」作成が志向された意義は少なからずあるだろう。というのも、高齢化社会の進展に伴い、介護をはじめあらゆるケアのあり方に社会的な関心が寄せられている。しかしながら、ケアにまつわる当為論的側面を扱う研究(たとえば、ケアをめぐる社会制度なり政策をめぐる研究、ケア技術論)については蓄積が進みつつある一方で、ケアをめぐる社会的リアリティを、とりわけケア提供者と受け手の関係性という側面から徹底的に再構成しようとする研究は、まだ緒についたばかりだといえる(佐藤, 2004)。とりわけこうした位相に立つ研究は、政策論や制度論に対して絶えざる検証と再検討の可能性を提示しうるであろうし、技術論に対しては内在的、かつ現場への批判的側面からのフィードバックの素材を提供しうるのではないかと考える。

文 献

- 千葉大学社会学研究室 1994 『障害者という場所-自立生活から社会を見る (1993年度社会調査実習報告書)』千葉大学文学部行動化学科社会学研究室 (<http://ehrllich.shinshu-u.ac.jp/tateiwa/0b/> より 2001. 08. 28 にダウンロード)
- Conrad, P. and J. W. Schneider 1992 *Deviance and Medicalization: From Badness to Sickness: Expanded Edition*, Temple University Press, PA. (=2003 進藤雄三監訳『逸脱と医療化—悪から病いへ』ミネルヴァ書房)
- Freidson, E. 1970 *Professional Dominance: The Social Structure of Medical Care*, Atherton Press, N. Y. (=進藤・宝月訳『医療と専門化支配』恒星社厚生閣)
- Flick, U. 1995 *Qualitative Forschung*, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH, Hamburg. (=小田博志・山本則子・春日 常・宮地尚子訳、『質的研究入門—(人間の科学)のための方法論』春秋社)

- 片桐雅隆 2000 『自己と「語り」の社会学』世界思想社
 野口裕二 2004 「援助実践の社会学」『福祉社会学研究』1 東信堂
 岡原正幸 1990 「コンフリクトへの自由—介助関係の模索」安積・岡原・尾中・立岩『生の技法』藤原書店
 ——— 1998 『ホモ・アフェクトス—感情社会学的に自己表現する』世界思想社
 Persons, T. 1951 The Social System, Free press, Macmillan, N.Y. (=1974 佐藤勉訳『社会体系論』青木書店)
 佐藤 恵 2004 「障害者の自己決定とボランティア/NPOによる支援」『福祉社会学研究』1 東信堂
 進藤雄三 2004 「医療と「個人化」」『社会学評論』54-4
 立岩真也 1990 「はやく・ゆっくり—自立生活運動の生成と展開」安積・岡原・尾中・立岩『生の技法』藤原書店。
 ——— 1995 「自立生活センターの挑戦」安積・岡原・尾中・立岩『増補改訂版 生の技法』藤原書店。

付 記

本研究の成果は以下の学会にて発表された。(いずれも口頭発表)

平成 16 年 6 月 27 日 第 2 回福祉社会学学会大会 自由報告部会「'世話焼き' という対人援助規範—共依存的援助関係と自立生活の介助関係—」(於: 東京大学)

平成 16 年 11 月 20 日 第 77 回日本社会学学会大会 自由報告部会「対人援助における自己決定と社会の '個人化' —障害者の自立生活における介助関係と介助者の '語り' から」(於: 熊本大学)

* 慶應義塾大学大学院社会学研究科社会学専攻後期博士課程

上層資産階層の再生産戦略に関する研究

——カトリック系女子教育機関との関連を中心に——

小 山 彰 子*

はじめに

本稿は、上層資産階層の教育を媒介とした再生産戦略の様態を明らかにする目的で継続して行っているインタビュー調査の中から、特にカトリック系女子教育機関とその出身者に焦点化して「語り」と歴史資料に基づいて整理したものである。

筆者は、2002年から上層階層に焦点をあて、教育を媒介とした再生産戦略に関するインタビュー調査を行っている。その過程で、昭和20年前後出生の上層階層の女子に関して、都市部については¹⁾、カトリック系女子教育機関出身者が多かったため、改めてカトリック系女子教育機関とその出身者に焦点化して調査を行っている。本稿はその中間報告である。

もともとカトリック系キリスト教は我が国の歴史において排斥の経験を有しており、幕末からプロテスタント系キリスト教伝道会社が漸次「近代技術」を携えて来日し、政府の中枢に進出を果たしたことと対照的に、カトリックは「耶穌」という蔑称で扱われ、プロテスタント系キリスト教とは一線を画している。更に、明治になり近代女子教育が始まると、プロテスタント系伝道会社は築地の居留地、横浜などを皮切りに全国規模で教育機関を開設していった。このような状況下、カトリック系女子修道女会は明治6年サン・モール会、明治11年聖パウロ女子修道女会、遅れて明治41年聖心会が来日を果たしている。先の二つの修道女会と聖心会では、来日時期によって我が国の社会状況が大幅に異なるため²⁾、当時の受容の程度、運営の円滑さ等に大きな隔りがあるものの、いずれも現在まで継続して運営されている女子教育機関の宗教的母体である。当時我が国ではカトリック系キリスト教は「社会事業者」と